

成人式祝辞

新成人の皆さん、おめでとうございます。また、今日まで深い愛情を持ってお子さんを立派に育て上げられた保護者の皆様、ご家族の皆様にも重ねてお喜びを申し上げます。

皆さんの表情は、とても晴れやかで眩しくもあり、日本の未来は明るいぞと心強く感じています。皆さんの現在の心境は、大人の仲間入りをすると行った気負いより、久々の故郷での旧友との再会に心躍っているといったところが本当かもしれませんが、折角の節目でありますので、皆さんが過ごした20年の軌跡を、これまで皆さんを支えてくれたご両親や大勢の方々との出会いに感謝しつつ、思い返して噛みしめていただきたいと思います。

皆さんは、平成6年から平成7年生まれではありますが、その頃はどんな年であったか少々振り返ってみたいと思います。政治的には自民・社会・さきがけ連立政権で社会党の村山富市党首が首班指名を受けました。その前年から続くイデオロギーの対立というよりは自民対非自民の政権争いという構図が今日まで続いています。阪神淡路大震災は、年明けの1月ですが、こちらも平成5年の奥尻島を中心とする北海道南西沖地震に引き続きの地震災害という悲しいニュースでありました。地下鉄サリン事件も年明けの3月に起きたものであります。日本を揺るがす大災害・大事件が頻発した時代でもあります。

勿論生まれた年のことは、皆さんにとって記憶にないことでしょうが、北海道南西沖と阪神淡路、東日本の三つの大震災は、災害列島に住む私たちの宿命として今後長く語りつないでいかなければならない出来事であります。

また、この20年の間は、経済的には低迷期とも言われていますが、近年になって日本にとって大変大きなターニング・ポイントがありました。それは、人口減少社会の到来のことです。特に、昨年の消滅可能性がある市町村の公表は、とりわけ地方に大きな衝撃をもたらしました。私たちは、確かな努力と挑戦者の気概を持ってこの人口減少社会に立ち向かってまいります。地方創生には、皆さんをはじめとする若いエネルギーが是非とも必要です。皆さんのふるさと厚真に誇りと愛着を持ち、皆さんのための新しい時代を皆さんの手で築いていただきたいと思います。

ここで、私からいくつかのお願いがあります。20才ともなれば、今後はこれまで以上に皆さんに対する期待が大きく膨らんでまいります。言い換えますと、権利と自由はより大きなものとなり、その代わり責任や義務はより重くなります。これらの自由や権利は、安全で健全な社会によって守られていることを自覚していただきたいと思います。

もう一つは、政治参加に関するお願いです。衆・参の国政選挙、知事・市町村長・各議会議員などの地方選挙が毎年のように執行されます。その都度マスコミの話題の中心となりますが、一方で、各種選挙の投票率の低下に歯止めがかからないことが心配です。日本の政治は選挙で選ばれた皆さんの代表がこれに当たりますが、棄権は、まだ見ぬ結果に白紙委任したことになると思います。つまり、棄権や白票は、時代や社会にもの申す権利と責任を放棄したこ

とになりますし、皆さんが政治に関心を失えば、政治は皆さんからどんどん遠ざかってしまいます。

話は変わりますが、皆さんと同世代で、東日本大震災の被災地である宮城県出身の羽生結弦選手がソチオリンピックでフィギュアスケート男子シングル史上初の金メダルを獲得し、大変注目が集まりました。羽生選手は、インタビューに対し「震災後、生活することすらぎりぎりの状態で、スケートをやめようと思ったけれど、表彰台に上がったとき、本当に日本の皆さん、世界中で応援して下さった皆さんの思いを背負って演技できたことをうれしく思った。」と話しました。

また、ノーベル平和賞を受賞したパキスタン人のマララ・ユスフザイさんは、「声を上げずに殺されること、声を上げて殺されること」の、どちらかの選択しかなかったと語り、武器を持たずに「人間の尊厳と子供や女性の権利、あらゆる権利」のために戦うことを誓っています。

西洋には”Where there’s a will, there’s a way.”と言う諺があります。「意志のあるところに道はある」と訳しますが、固い意志と困難に挑戦する行動力こそ大切なのです。

皆さんがこれから歩む道は、決して平たんな道ではないかもしれませんが、支えてくれる人が必ずいます。多くの出会いと一つひとつの努力の積み重ねが、いつか必ず大きな実を結ぶことになると思います。

結びに、皆さんの前途とご家族の皆様に幸多かれとご祈念申し上げ、祝辞といたします。本日は、誠におめでとうございます。

平成27年1月11日

厚真町長 宮坂 尚市朗